

編 集 後 記

○今日は、はしなくも世界史に新たな一頁を加えた講和會議調印の日、我が國が新生日本としてやつと獨り立ちを國際間に認められた日である。終戦直後の、あの混亂の坩堝にあつた當時を顧みると、今日あるのがまるで夢の様な気がする。併し、これからが又なかなか大變で日本國民は新たな義務と期待の重荷を負わされた訳である。終戦後の日本は、政治上、社會上餘りに多くのものを與えられて而も充分消化し切れず、未だに消化不良の状態にあるものも

尠しとしない。これらのものが講和を契機として目下再検討を加えられつゝある現況である。病院管理の問題も曾ては與えられたテーマであつたが、病院人の覺醒によつて僅か23年のうちにめざましい進展を示して來た。これにはいろいろ理由もあるであろうが、我が國の病院界に於て既に機が熟していたとも云えるのではあるまいか。

魚が水を得たよう

に活潑な活動が始まつたと見てよいのではなからうか。今や吾々は、病院協會をもち、病院管理の研修所をもち、更に順調な歩みを續ける専門誌をもつている。とすれば、既に必要な素地はでき上り、今後はこれを如何に育てゝ行くか、という問題史である。國際への復歸が通つた今日、前途に尙幾多の艱難が横わるとは云え、吾々は折角のこの芽を大切に守り育てゝ行き度いものである。

○前號に續く尾村委員のアメリカ見聞記は愈々佳境に入り、修飾せられざる米國の實態就中病院療養所の生の姿を知ることができた。これにより読者各位は、自ら顧みて或いは安心をし、或いは反省の資として役立つことと思います。

○病院管理研修所第二回長期講習生の共同勞作を整理された島内氏の單位病棟の話は、本號で完結するが、病院で働く者の立場から見た諸種のデータは、この種の

資料に乏しい我が國の病院人にとつて、参考となる點が尠くないであらう。

○臨床検査の中央化は我が國の病院に於てもアツプ・デートな問題となりつゝある。醫學の進歩に伴い、病院にとつては必然的な問題であり、オープン・システムの前提條件だと云つても過言ではあるまい。小酒井氏の論文は、我が國の病院の包藏する幾多の隘路を打開しよう

— 表 紙 説 明 —

鐵の肺の話—上海の患者を、鐵の肺に入れて、米國につれて歸つた話が新聞ににぎわしたのはもう20年も前になるが、その後日本でも小兒麻痺の患者が續々と出て、鐵の肺を望む事ひさしいが何せ100萬圓と聞いては手が出なかつた。我々2年前米國陸軍病院を見學に行つた時、鐵の肺が4臺も並んでいるのを見て、いざとなればとやや心強く思つた事であつた。所がその豫想があたつて昨年秋第1例にぶつかつた時、GHQのマニトフ博士及び米陸軍病院當局の親切な努力で、貸與してもらふ事が出來たが残念ながら、時機がおそかつたので不幸な結果に終つた。所が本年、7月たまたま、第2例が來てこの場合米當局の非常な努力で約3時間後裝用する事が出來て、危期を脱する事が出來た。現在約1ヵ月になるが、僅に足部を動す事が出來、5分間以上装置なくして、呼吸出來る様になつて、まあ一命を取りとめたと云えるでしょう日本における第1例です。

この機に病院と云うものはちやうど、消防車と同じで、一具を用意すれば百萬人が安心しておられると云うものです。この時にソロバン等の事は云わない方がいいでしょう。

病院のパブリックサービス、と云う意味で歴史的の事例ではないかと思う。(守屋 博)

とする、正に陣痛記録とも稱すべきもので、以て他山の石とされんことを期待します。

○吉田委員は、本號の出る頃にはもう米國の土を踏んでいる筈である。氏獨得の觀點から見た彼地の醫療問題について興味ある通信がよせられることゝ思うので御期待を乞う。

(講和成立の日、編者誌)